奥様の琴

内の奥様此頃はさっぱりお琴をお彈きなさらない。去年の二月に旦那様がお出征になってから此方、丁度あれは二月の九日であった。旦那様が明日はお出征と云ふ前の晩、大層よいお月夜の晩であったが、旦那様と奥様と、琴と笛の合奏をなすった。悲しい様な哀れな様なお歌で……蔭で聞いてた私達も思はずホロリとしたのであった。

其の時から少しもお琴にお手をお觸れなさらない。何故とお聞き申ても、たゞ微笑なさるばかりで、それでもお琴は大層お大切になさる。毎朝お掃除の役はいつも私なのだ。それがまた私に取って、此上無い樂しみなのだ、私の様な者がはたきで敲いてもコロンコロリンと優しい音を立てる。それだのに、あゝ奥様がお彈きなされたなら……

今年も最早秋になった。相變らず毎朝お掃除するお琴は怨めしい音を立てる様になったが、奥様は如何な淋しい日でも決してお琴をお彈きなさらない。朋輩のお竹どんはいつもこふ云ふのだ。

『奥様は旦那様が丈夫でお歸りになって、また合奏をなさるのを待って居らっしゃるのだ』と。

お庭の青桐の一葉がサラサラと散って、降りそゝぐ雨の音淋しい、何となくもの淋しい日であった。

電報！　の聲に私が受取って、机に向って何か考ひて居らっした奥様の前に差出した時、その時、幽かな震がお唇に昇ると見る間に、開かれたみ手はワナワナと震ひ、お顔は眞青になって、ワッとばかり……あゝ其時私は如何して宜いやらわからなかった。

やがてつと起って佛間にお入りなされた奥様は、やがて現はれた奥様は、あゝ舊の奥様では無かった。彼の房々としたみ髪は、根元からフッツリと……

あゝ　旦那様は戰死なされたのだ！

奥様は切下げ髪の未亡人になられたのだ！

一月許過ぎてから、旦那様の遺骨は、遺品と一緒に到着た。

血に汚れた軍服、血糊の附着たサーベル、破れた軍帽、皆思ひ出の種なる遺品のうちに、彼の笛もあった。然しそれも舊の儘では無い、彈丸の爲めとやらで、眞中から二つに折れてあった、奥様はそれを見て大層お泣きなさった。

或る日の事である。いつもの通りお琴のお掃除を始めると、如何した途端か一本の糸はプツリと切れてしまった。あゝ私は如何仕様お大切なお琴を……と泣きそうになって居

る處(ところ)え、奥様はお出(い)でになった。私が涙を流してお詫びするのを黙って聞いて居られたが、引出しから小刀(ナイフ)を出されたかと見る間に、糸は怪しい音を立て、空(くう)に飛び上った。お怒りの餘りかとはッとして、御袖(おそで)に縋ッてお詫びするのを

『いゝえ心配するには及びません、どうせ用(よう)の無い琴ですから……』と微笑(おわらひ)なされた其顔の淋しかったこと……

入力者注：以下の修正を施しました。

いらっしゃるのだと』　→　いらっしゃるのだ』と。

切下(きりさげ)げ髪(がみ)　→　切下(きりさ)げ髪(がみ)

底本：「水野仙子全集」第一巻
初出：「女子文壇」明治三十八年七月
テキスト入力：小林　徹
公開：平成二十九年八月十日
リンク：水野仙子ホームページ